

奈良教育大学

平成30年度 陸前高田市文化遺産調査報告書



平成31年3月

平成30年度 近畿ESDコンソーシアム

はじめに

奈良教育大学 学長 加藤久雄

2011年3月11日に発生した「東北地方太平洋沖地震」が引き起こした津波は、陸前高田市に甚大な被害をもたらし、1750名以上の方々が犠牲となりました。この大震災から8年が経ちました。その間、予備調査を含めて本年度で8回目になる、陸前高田市文化遺産調査が行われてきました。この調査のきっかけは、陸前高田市の一市民から文化庁に寄せられた、陸前高田市で被災を免れた文化遺産に対する調査依頼でした。当初は、被災地支援の一環として始めた取組でしたが、今では、文化財調査を通して、その地域の歴史を紐解き、学ばせてもらう「学びの場」となっています。今年度も陸前高田市内の常膳寺や圓城寺などでの調査をさせていただきました。



もう一つの「学びの場」は、被災地を見学したり、被災された方々へのインタビューをさせていただいたりして、防災や減災について考える機会を与えてもらっていることです。この活動になくてはならない方々がおられます。陸前高田市教育委員の松坂泰盛様、高田松原を守る会の及川征喜様、及川江巳様です。前述の被災地見学や被災者へのインタビュー等の調整を快く引き受けていただいています。今回も津波関連石碑探訪や教育委員会との調整などにご尽力いただきました。このような方がおられて、この調査も成り立っているものと感謝しています。今回は、震災当時気仙小学校で勤務されていた現陸前高田市教育委員会の関戸氏から児童の避難や避難後の様子などを直接お聞きすることができました。津波が迫る中、先生方の的確な判断、迅速な行動で裏山（通称ワンパク山）に駆け上り、一人の犠牲者も出さなかったことや避難先での生活、今、必要としているボランティアの話など、これから教員を目指す学生にとって、防災教育（子どもの命を守る）を考えるうえで、大きな力となったものと確信しています。

防災教育・文化遺産調査は、本学が推進している、「持続可能な開発のための教育(ESD)」の一つとして、今後も続けてまいりたいと考えています。

最後になりましたが、陸前高田市教育委員会をはじめ、ご協力いただいたすべての皆様に感謝申し上げます。

目 次

はじめに・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	1
平成 30 年度 第 7 次陸前高田市文化遺産調査報告概要・・・	3
陸前高田市文化遺産調査の活動を行って 上田 薫・・・	8
陸前高田市文化遺産調査に参加して・・・辰上亜弥子・・・	10
陸前高田市文化遺産調査に参加して・・・西村 奏・・・	12
実際に見て聞いて学んだこと・・・・・・・・仲村幸奈・・・	14
7年後の被災地から見えたもの・・・・・・・・櫓乃里花・・・	16
陸前高田市文化遺産調査団に参加して・・・近藤花梨・・・	18
ESD 子ども用教材「常膳寺 一気仙の観音」・・・・・・・・	20
陸前高田市文化遺産調査における ESD 教材開発 (8)・・・	22
岩手県陸前高田市円城寺・岩手県大船渡市長谷寺・・・・・・・・	36
仏像調査報告書	

平成 30 年度陸前高田市文化遺産調査 概要報告

次世代教員養成センター 北村 恭康

1. 目的

2011年3月11日の東日本大震災及び大津波により、陸前高田市をはじめとする岩手・宮城・福島三県の太平洋岸は大きな被害を受けた。陸前高田市では市民の約1割にあたる人命が失われたほか、市庁舎を始め、博物館や図書館、文化ホール等の市の重要施設が被災した。多くのものを失ってしまった。しかし、幸いにも高台にあった寺の仏像は被災をまぬがれた。この仏像等の文化遺産を調査し、その価値を明確にすることが、陸前高田市や周辺市町村の市民を元気づけることになると考え、本調査団を派遣する。併せて被災地の状況を視察し、被災された方から聞き取りを行い、現地に学ぶ防災教育を開発する。

2. 日時 平成30年9月9日(日) ～ 12日(水)

3. 参加者 学部生 : 上田 薫、辰上亜弥子、仲村幸奈、櫛 乃里花、西村 奏
大学院生 : 近藤花梨
大学教員 : 山岸公基、北村恭康

4. 宿泊地 民宿吉田 (陸前高田市米崎町松峰 110-5)

5. 日程・活動

9月9日(日)

- ・仙台市博物館・仙台城見学 (仙台市青葉区川内 26)
- ・黒石寺 (奥州市水沢区黒石町字山内 17) 薬師如来坐像・僧形座像(伝慈覚大師座像)拝観

9月10日(月)

- ・陸前高田市教育委員会表敬訪問
- ・常膳寺 (陸前高田市小友町字上の坊) 千手観音菩薩立像調査
- ・広田半島周辺の津波関連石碑の探訪 6か所 黒崎神社前中吉丸の石碑見学

9月11日(火)

- ・長谷寺 (大船渡市猪川町字長谷堂 127) 十一面観音像調査
- ・吉浜の津波石探訪 (大船渡市三陸町吉浜)
- ・圓城寺 (陸前高田市矢作町愛宕下) 馬頭観音菩薩坐像調査
- ・津波の気仙川遡上ポイントの探訪 (陸前高田市横田町友沼)
- ・吉浜の津波石探訪 (大船渡市三陸町吉浜)
- ・震災当日気仙小学校勤務の教員に聞き取り調査 (教育委員会主任指導主事関戸文則先生)

9月12日(水)

- ・奥州市埋蔵文化センター見学 (奥州市水沢区佐倉河) ・中尊寺見学 (西磐井郡平泉町平泉衣関)
- ・無量光院跡見学 (西磐井郡平泉町花立) ・毛越寺見学 (西磐井郡平泉町字大沢)



黒石寺



常膳寺



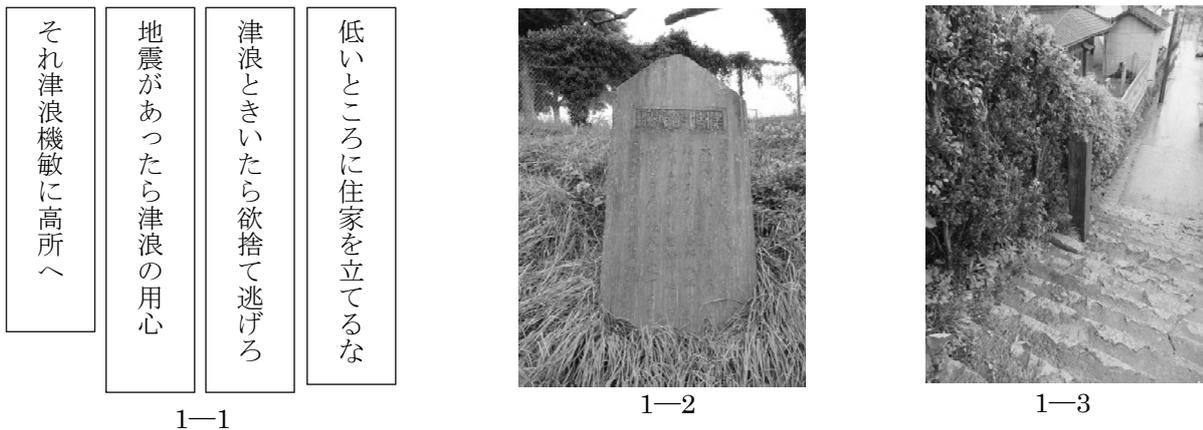
長谷寺

6. ESD・防災教育における今回の調査目的について

今回の調査においては、大きく2つの目的があった。1つは、気仙川津波遡上ポイント・広田半島の津波関連石碑探訪(6か所)・一本松等、現地に立って、自分たちの五官を通して視ることである。2つめは、①震災時気仙小学校で担任をされていた先生から子どもたちを避難させるにあたって、マニュアルを超えることができたのか。②7年後でも必要とされるボランティアは何か。③今から思うと災害が起こる前、どう行動すべきだったのか。という3点の聞き取りである。

(1) 五感を通して視る

○広田半島の津波関連石碑探訪では、松阪泰盛氏の案内で周った7か所設置されているが、工事等で6か所の石碑を視ることができた。そこには、下図(1-1)のような文言が4面に記述されていた。また、広田小学校の法面には同様の文意が石碑(1-2)に刻まれていた。建立が昭和9年3月となって



いるところから昭和8年の地震津波の教訓から建てられたものと思う。しかし、写真(1-3)を見てもらうとわかるように、石碑は階段の途中にあり、それより低い位置に今は住家がたっている。石碑の近くで今回の津波はどこまで来たのかを聞いてみると、石碑6本中1か所だけが、石碑より上までいったとのことであった。4本の石碑は、現在の住家より高所に立っていた。平坦部の少なさを考えれば、と思うところもあるが、これは、昭和8年の地震津波、チリ地震津波から得られたものが、何十年という時間の流れの中で忘れ去られ「今回も大丈夫」という気持ちにさせていったのではないだろうか。ここだけのことではない。このような先人の思いが記されているものは、各地に残っているはずである。それらに目を止めどう行動するのかを考えなくては、いかなる自然災害に対して対応できなくなるのではないかと思う。前回の調査報告の中で、行政の取組として「空振り」を恐れず積極的に避難情報を伝える。とあったが、住民も「空振り」であったとしても、避難しないリスクを考えなくてはならない。また、津波の高さは伝えず、避難情報だけを伝える方法に変化しているともあったが、これも、石碑にある「それ津浪機敏に高所へ」と住民は行動できるよう防災スキルの向上を図っていかなければならない。

○気仙川の津波遡上ポイントには今「東日本大震災津波到達点」という碑が立っている。(2-1)この場所は、後日グーグルマップで調べると気仙川河口から約7.6kmの地点であった。近くの農家の人に話を聞くと、自分のところでは被害がなかったが、右岸にあったブロイラーの養鶏場が被害にあったとのことであった。遡上する津波の強さは途中の鉄橋の破壊された姿を見たときに想像することができたが、さらに3Kmほど遡上していったとは考えも及ばなかった。





防潮堤と一本松



吉浜の津波石

(2) 聞き取りより

① 関戸文則氏(当時気仙小学校で5年生担任をされていた)

先生は、記憶があやふやのところもあるのですがと言いながら、当日の話をされた。その一部を掲載する。

第二避難場所も波に被られ、行っていたらダメだった。

警報が出たので、子どもたちを校庭に避難させ、全員いるか確認をした。当日は教頭、校長先生は出張でおられなかったが、校長先生は市内出張だったので、子どもたちを並べて、ワンパク山に避難するかと言っている間に、どうにかして戻ってこられた。その間に、親御さんたちが子どもを引き取りに来られたが、「警報が解除されるまで私たちとしましょう。」「万が一巻き込まれたら大変だから」「小学校が避難場所だから、家に戻るなんてとんでもない」ということで留まってもらった。先生一人と地域の人一人がワンパク山の少し高いところ、学校の屋上で一人、海の様子を見るためにいたのですが、「津波が来るぞー」と騒ぎ始めたので、全校児童がワンパク山の下まで動いた。(少しずつ前からワンパク山に近づいていた。そこで誰かが第二避難場所に行こうと言ったらアウトだったかな。) 1年生から行かせますかと。道は細かったので一人ずつぐらいいしか行けなかった。

においがした。何のにおいと言ったらよいか。埃のにおいと言ったらいいのか、水煙の臭いがした。そして、なんであんな高さのところに黒い壁があるのかと思っていたら 津波だ。ワンパク山に子どもたち一人一人を行かせると間に合わないの、高学年をそこは道もない藪だったんだが、藪を踏み倒し登らせた。バキバキとして行った。そのあと低中学年を登らせた。低中学年を先に登らせると体が小さいのでスピードが落ちるので、そのあとに低中学年が続いた。

私が最後だったので、波は1m ぐらいいまで来ていた。何人かの人を引っ張り上げたが、だんだん波が上がってくるので、ダメだなあと思った。校庭に何十台車がとまっていて地域の人もいたんですが、ちょっと厳しい状況でした。登った人は助かった。第二避難場所に行った人も厳しい状況だった。

※ワンパク山 日頃から子どもたちは遊び慣れている学校の裏山で運動場に接している

この部分は、陸前高田市東日本大震災検証報告には、学校管理下にある児童が一人も犠牲者を出さずに済んだことは、教職員の臨機応変な対応や地域住民の助言などから、決められた避難所に留まらず、さらに高台に避難所をうつしたことが考えられるとある。

また、チリ地震の時はこの辺は被害がなかった。来ても校庭が水につかるぐらいだろうと思っていた。考えが甘かった。とも話されている。さらに、第二避難場所ではなくワンパク山に避難した理由として、①波が目の前に見え、第二避難場所に行く時間がなかったこと、②あの子の判断は一択(ワンパク山)しかなかった。と述べられていた。

山に逃げることに意見の対立はなかったのかという質問には、揺れが尋常ではなくこれはまずいとみんなが思っていたので、対立はなかったと。さらに、子どもたちが登り始めてから津波が来るまで

の時間を 30 秒から 1 分ぐらいと述べられている。こういう状況を聞くに及んで、

行動と結果はいつも良い方向に向かうとは限らないが、この話の中に人の命を預かる者が状況を考え、判断し、行動しなければならないことが 5 つほど示唆されていると思う。それは、

- ①子どもを迎えに来た保護者を避難場所である気仙小学校に留まらせ子どもを引き渡さなかったこと。
- ②第二避難場所は危ないと判断し行かなかったこと。
- ③少しづつ避難位置をワンパク山に近づけていたこと。
- ④津波の見張りを置いていたこと
- ⑤わんぱく山に逃げるとき、体格のある高学年を先に登らせ、低中学年が少しでも登りやすくするために藪を踏み倒させていたこと。である。

①は 1 週間ほど前に津波警報が出たときには、子どもたちを親に返したことを「危なかったなあ」と回顧されてる。この時は、「今までは何もなかった」という気持ちがあり、マニュアル通りの行動をされたと推察される。が、今回は今までとの違いを体で感じ「危険」を察知された行動であると思う。②は結果的には避難マニュアルを破ったことになるが、より高所へ逃げるのが安全と状況から選択の余地はないと瞬時に判断された結果であろう。③は先生方は地理的状况から、早くから第二避難場所よりワンパク山に逃げるのが安全という意味統一がされていたが、まさか校舎を飲み込む津波が来るとは思いもよらないため、すぐにワンパク山の直下で待機という行動に移せられなかったのだろう。しかし、最悪の事態を予想して子どもを移動させていたことがよい結果につながったと思う。④はより正確な情報収集するための行動であり、それを怠らなかつたことが良かったと思う。⑤は緊迫した状況の中でも、どうしたら全員避難することができるのかを考えた、取り得る最善の判断ではなかったかと思う。これらは、教職員全員が「子どもを助けなければ、子どもの命だけは、何とかしなくては」という思いからのとっさの判断であったと思う。この思いが、後日に続く教職員の行動の原動力になっていったのではないかと考える。これらの事から、非常時にあつては正確な情報収集を行い、起こりうる事態を予想し、的確な判断をしてすぐに行動に移さなければならない。的確な判断とは、過去はどうであったとかの先入観を捨て、今の状況を直視して行動することである。

その後、先生は、

○登っていくと林道にぶつかるが、少しでも上に登らせたので、子どもたちが山中に広がり、全員を確認したのは 1 時間 30 分後ぐらいだった。

○消防車が 1 台登ってきて、林道下の熊谷さんという家に避難した。低学年は消防車に乗せてもらう。

○情報が欲しくて、ラジオを聞くが全くない。入ってくる情報は、壊滅状態、連絡が取れない それしかなかった。

○熊谷さん宅から 20 分ぐらい歩いて、お寺と神社に低高学年に分かれて避難をした。

○音がない、光がないと恐ろしい。

○先生方は、子どもを何とかしなくては、子どもの命だけはという思いで動いていたのでパニックにならなかった。

という話を続けられた。

下の (3-2・3-3) 写真は被災時の気仙小学校である 写真からでも先生方や子どもたち、地域の人々が、我々が想像すらできない状況下に置かれた避難行動であったことがわかる。

(3 枚の写真は関戸先生からいただいた)



被災前の気仙小学校 3-1



被災した気仙小学校 3-2



体育館が燃える上がる気仙小学校 3-3

また、いくつかの質問の中で、

- ①ああいうときは、何かしておかなければおかしくなる。この状況は何なのか、夢を見ているの、映画を見ているのか、わかんなくなっちゃう。
- ②今回の地震津波を想定外で終わらせてはならない。イメージとしては理解しているが、なかなかできない。いつでも行動できるようにしておく。
- ③自分は大丈夫と思ったことが危ない。

ということを述べられた。①は、避難所の話の中で出てきた言葉だが、辛くても、今の事態を乗り越えるために出来ることはしていこうと行動すると、徐々に現実を直視できるようになるのではないかと思った。「人間は役割があると動き出す。」「各自が率先して自分の出来ることことをやり始める」とも。②③は、先入観は捨てて考え、情報を集め、確認し行動することが大切であると教えていると思う。

しかし、最後にこうも言われている。

「私たちが今グラッときても、あの時と比べれば大丈夫だという変な言い聞かせをする」と。

②今必要としているボランティアは

聞き取り調査を行った中で

- ・避難所から仮設住宅、そして新居へと移っていく人もあるが、特に新居に移った子どもたちに落ち着きがなくなっている。話し相手がいない、自分たちだけが出てきた。という感じがある。
- ・子どもたち(大人)も2度(元の場所・避難先)コミュニティが崩れている。元の住まいは育ってきたところ、避難先で親しく話をしてきた人、そこでの「よりどころ」が新居に移ってなくなってしまっている。新居では「つながり」がまだないのではないかな。
- ・大人も話し相手がいる。

と述べられた。震災後の学校では、ボランティアと絵を描いたり、親が死んだこと、ペットが流されたりしたことを話し、自分自身の思いを出す(話す)ことにより気持ちの整理をしていたと伺った。7年という時間を経て、震災直後から人が、地域が必要としているものは変化してきていると思うが、変化していないのは「自分の気持ちを聞いてくれる人」、「日時用的な会話をしてくれる人」なのではないだろうか。これが、これからのボランティア活動の中心になっていかなければならない。

陸前高田市文化遺産調査の活動を行って

美術教育専修 一回生 上田 薫

1. はじめに

2018年9月9日～12日、岩手県陸前高田市にて第7回目となる陸前高田市文化遺産調査が行われた。調査団の構成は文化遺産班と防災教育班の2班に分かれて活動を行い、今回私は防災教育班の活動に参加した。調査団の活動内容は、吉浜の津波石や奇跡の一本松探訪などの現地調査、さらに現地の方々への聞き取り調査などを行い、陸前高田市教育委員の松坂泰盛氏や教育長の金賢治氏、震災当時気仙小学校で5年生の担任をしておられた関戸文則氏が快くインタビューに協力してくださった。そのほかにも、中尊寺、毛越寺などの寺院見学も行った。



↑ 吉浜の津波石

2. 被災地の現状から考えたこと

東日本大震災が起こったとき私はまだ小学校の5年生だった。テレビでの中継で被災地の様子が放送されており、家屋が津波に流され、瓦礫の山と化した市街地に、その後瓦礫が撤去され、何も無い土地がひろがっていた映像をはっきりと覚えている。

あれから7年が経ち、陸前高田市文化財調査団に参加することになった私は、被災地はどんなところだろうと思いつかべたとき、昔映像で見た何も無い土地の光景しか思い浮かばず、それ以外は何もわからなかった。それについては自分自身の被災地に対する情報が、7年前から更新されていなかったのだと考えている。実際現地に行ってみると、高台には新築と思われる家屋が建ち、お土産屋さんや軽食が食べられるお店が併設されているところもあった。しかし、大部分が盛土工事が進行中のところであり、復興までの道のりは長いものだと感じた。このことから二つ分かったことがある。一つは被災地の現状は自分のイメージとは少しばかり違っていたこと。もう一つは被災地の状況は現地へ赴くことを除けば、きちんとメディアが報道しなければ分からないということだ。今現在、被災地に関する報道は少なく、震災が起こった3月11日にしか報道されていないように感じる。これでは、調査団に参加する前の私のように、被災地の現状はどうなっているのかが分からない、もしくは被災地に対して「まだ更地のまま」「もう復興は完了した」などといった間違った認識を持ってしまう可能性があると考えた。

3. 調査団での学び

今回の調査団の活動の聞き取り調査内容は、①気仙小学校の児童が教員のとっさの判断により、全員津波から逃れたことについて避難マニュアルを破る判断をした理由について。②心のケアを中心とした、震災から七年経った今とこれからも必要なボランティアについて考えるためのものの二つであった。まず①についてインタビューに答えて下さった関戸氏は、津波が襲ってきたとき、子どもを助けることしか考えられなかったと話していた。そんな中で子どもたちを助けられる唯一の選択肢は、本来の避難場所の第2次避難所に行かず、学校の裏山に逃げることであったという。「わんぱく山」と呼ばれている学校の裏山は、普段から子どもたちの遊び場であり慣れ親しんだ場所であったため、逃げやすかったというところも理由の一つだろうと述べられた。また、避難についての意見対立は起きなかったのかという

質問に対しては、教員の子どもたちを救う想いは一緒だったため、対立は起きなかったと述べられた。私は、関戸氏をはじめとする教員の方々の判断は素晴らしいものだと思っているが、実際考えてみると全国の学校が気仙小学校のような環境にあるわけではない。学校のある場所や、児童生徒数、避難マニュアルが地域によってさまざまなのは当たり前である。そこで、どうすれば児童生徒全員が避難できるかは避難経路や、避難訓練の見直しにかかっていると感じた。気仙小の事例で



↑気仙川沿いの仮設住宅

は、2次避難所は津波に飲み込まれている。これはマニュアル通りの避難では助からないこともあるということであり、今までの避難場所、避難訓練などを見直さなければならないという危機感を抱いたインタビューであった。②はこれから必要なボランティアについて、関戸氏は7年たった今だからこそ被災者の話を聞いてくれるボランティアが必要だと述べられた。なぜかという、震災から7年が経ち仮設住宅から新築の住居に移り住む人々と仮設住宅に残された人々が現れたからだという。新築の住居に移り住んだ人々は今まで過ごしてきた仮設住宅というコミュニティをなくしてしまい、これからどうしていけばいいのかわからなくなったり、仮設住宅を先に出してしまったという罪悪感から、心が荒んでしまったりすることがあるのだそうだ。一方仮設住宅に残された人々も、新築の住居に移り住む人々により縮小した仮設住宅のコミュニティに対して寂しさを抱えていると関戸氏は述べられた。だからこそ、荒んだ心や、寂しさを取り除けるように、被災者の話を聞くボランティア「心のケア」が大切なのだと感じた。

3. 最後に

「今これからも必要なボランティア」に関しては調査団の活動が終わった後もその重要性について多くの学びがあった。どういうことかという、12月1日に近畿ESDコンソーシアムが開催された。そのコンソーシアムのテーマが「被災地ボランティア」についてであり、参加されていた団体のTake ActionさんやEARTHさんの発表において、今回調査団で学んだ「今これからも必要なボランティア」について同様の内容がいくつも見受けられたからだ。Take Actionさんの発表で、心のケアにおいて人々を笑顔にするというエンターテイメントからのアプローチをしており、ボランティアにも様々な形があるということを深く感じることもできた。これらのことから、心のケアのボランティアが被災地においてどれだけ重要な意味を持っているのかをありありと感じ、学び取れた瞬間であった。

調査団に行った時だけでなく、そのあとも含め災害や心のケアに関して有意義な学びができたと考えている。東日本大震災や西日本豪雨もまだ復興への道は続いている。今回の学びを生かし、自ら被災地の力になろうと考えている。

陸前高田市文化遺産調査に参加して

文化遺産教育専修一回生 辰上 亜弥子

1. はじめに

2018年9月9日から12日にかけて、陸前高田市文化遺産調査に参加し宮城県と岩手県の文化財、被災地を見学調査した。特に文化財調査の経験が皆無に等しかった私にとって、とても貴重な体験であった。

2. 被災地に行ってみて

以前より学生ボランティア参加のチャンスがあったにも関わらず避けていた私にとって、今の被災地はどのような状況かあまり想像出来ないものだったが、まだ更地が多いことにとっても驚いた。ボランティア参加経験のある友人から聞いていた風景と変わりがなく、昔はここに住宅街があったのだと説明されてもにわかには信じがたかったし、当たり前にも身の回りに存在している“まち”も作り出すのに大変な時間がかかっているのだと痛感した。



倒壊したユースホステル

海に面した広島市で育った私にとって、海はこの地とおなじくらい身近なものだったが、それが突然牙を剥くなど震災発生後も想像できなかった。しかし、倒壊したユースホステルやこの場所にあったとされる青々とした松原、なによりまばらにしか見止められない人家を目にすると、実際に現場に来るものだったと思った。子どもたちにとって、自分たちの慣れ親しんだ学び舎が無くなったというショックも相当なものだっただろう。そんなショックとストレスを抱えながら勉強することもたちの心のケア、学習面のサポートは何より優先すべき問題だと感じた。

3. 文化遺産調査と信仰

この調査の1か月前に、上回生の授業の見学として教授や先輩方が仏像の調査を行うところを間近で見ることがあった。像の清掃や3Dスキャン撮影の軽い補助等も体験し、調査には何が必要なのか、どのように立ち振る舞えばよいのか考えながらまだ見ぬ東北式の仏像にわくわくしていた。今回は複数の寺において、照明を使用した写真資料の撮影や口述記録の作成などを行った。私は若輩者として山岸公基先生にご教授いただき、像の子細な観察やスケッチ等を行った。常膳寺では千手観音と秘仏・十一面観音立像の撮影などが行われている間、堂の隅に置かれていた千手観音の光背(写真)の観察とスケッチ、それを踏まえた知見の報告を行った。何よりも観察対象をつぶさに見ることが基本として重要であると教わった。それにより材の継ぎ目や様々な彫刻技法、破損部分を見て取ることができた。ぎりぎりまで顔を近づけて見ることも調査でしかできない、貴重な体験だった。

しかし、このように訪れた様々なお寺で私が一番失念していたと感じたことがある。それは、仏像など我々の「調査対象」もその地に住む人々にとっては「信仰の対象」であるということだ。はじめには必ず教授のお声掛けに合わせて礼拝を行い、常膳寺では最後にご住職がお経を挙げられた。円城寺で、馬頭観音像の埃を掃除した際にその塵をご住職が大切に包んで供えられていたところも強く印象に残っている。東日本大震災が起きてからも、たくさんの祈りをささげられたのだろうと像を見るたびに思うようになった。同時に、どれほど興味をそそられる文化財であろうと、美術品としてみる前に多くの人々の信仰の対象であることを忘れず調査・鑑賞の際にも畏敬の念を忘れないようにしようと強く思った。

また教材開発においても同じように、ただ美術品として紹介するのではなく宗教、人の心にも触れつつ発展させていきたいと思った。



定膳寺の光背

4. まとめ

7月に故郷の広島で土砂災害があり、それからずっと支援活動が続けている友人が「子どもたちのケアが一番大変だ」とよく私に話してくれた。局地的な災害であっても学習環境が整わず、学習の遅れが出てくる子どもも少数いたという。東日本大震災ほどの規模であったなら私の想像を超えるものであつただろう。今までの災害を教訓に学習・教育現場の見直し、再開が必要ではないかと思った。

また、文化財の防災も学んでみたいと思った。揺れによる落下や破損、二次災害の対策は小さな収蔵庫などでは完全なのだろうか。なるべく展示の邪魔をしないよう丈夫に支えられれば、文化財の破損を防げるのではと思った。

1回生でこのような調査に参加できたのはとても幸運だと思う。この場で学んだ様々な事柄から興味を広げ、今後の大学での学びに活かしていきたいと思った。

陸前高田市文化遺産調査に参加して

文化遺産教育専修 2回生 西村 奏

(1) はじめに

2018年9月9日から12日にかけて、私は陸前高田市文化遺産調査に参加した。防災教育班と文化遺産調査班の二手に分かれ、被災地の現状や復興活動を知り、陸前高田市常膳寺や圓城寺などで調査を行うことで、陸前高田市について知ることができた。その内容について、述べていこうと思う。

(2) 被災地の現在と防災教育

私がこの調査への参加を希望した動機は二つある。一つ目は、文化遺産調査を実際に経験したかったということである。これまで私は、文化財について既存の本で読んだり、実際に訪れたりして学んできたが、文化財に対してほとんど“受け身”な状態であった。しかし、私は将来文化財に携わる仕事をしたいと思っているので、実際に調査を経験して、文化財について自ら取り組むということがどういうことかを知ることで、今後の学習に繋がりたいと思った。二つ目は、故郷が今年の6月から7月にかけての西日本豪雨で被災したことである。私の故郷である岡山県倉敷市はこの豪雨により、川が氾濫したことで周辺の地域が水に浸かった。実家は幸い被害は無かったものの、私の何人かの友人が帰る家を失った。倉敷市は晴れの日が多く、また地震の危険性も低かったため、数年前まで災害の少ない地域として有名であった。しかしその安心感が油断を生み、今回の災害では徒となった。市全体の防災対策が甘く、避難所の管理体制、市の職員への勤務配分、支援物資への対応など、決して良かったとは言えないと思う。そのため、今回の陸前高田市文化遺産調査を通じて、復興事業をどのように進めているのか、また、災害の経験を踏まえて防災対策をどのように取り組んでいるのかを知り、自分の故郷のそれを見つめなおしたいと思ったのである。

今回実際に被災地を訪ねてみて思ったのは、自分が考えていたよりも復興というものは時間がかかるということである。私が小学校6年生の時に東日本大震災は起こったため、およそ8年もの歳月が流れている。「復興なんてとっくに終わっているだろう」と思っていた私は実際に行ってみて考えを改めさせられた。まだショベルカーや土砂を積んだトラックが何台も行き来しており、震災前の活気が完全にもとに戻ったとはとても言える状態ではなかった。町の物理的復興だけでなく、被災者の生活や心理的復興も金銭的な補助だけでは解決しないということを実感した。もともと住んでいた場所に戻って住みたいが、新たに住宅を建てるのが困難であったり、家族を亡くして心に深い傷を負ってしまったり、人によってさまざまな障壁があるのだと知った。



高台から見下ろす陸前高田の街

(3) 文化財調査

前述の通り、今回の陸前高田市文化遺産調査が、私にとっての初めての調査となった。

今回文化遺産調査班が教材開発の題材として選択した常膳寺仏像調査では、山岸先生が千手観音像の撮影・調査をする間、私たちは取り外されている光背のスケッチ・観察を行った。調査のはじめ、私は撮影とは別でスケッチを取る意味が分からなかった。だが、スケッチをすることで、目視のみで観察するより細かく観察することができるのだと肌で感じることができた。例えば、欠損箇所や唐草文様・流雲の特徴、今は失われてしまった附属部品の存在などが挙げられる。考えてみれば、大学の彫刻の授業で弥勒菩薩半跏思惟像の顔を模刻した際も、その造形についての深い理解を得ることができた経験がある。集中して観察することの大切さを実感した。



常膳寺千手観音像光背

また、圓城寺仏像調査では、馬頭観音像を実際に動かし、底部の墨書を実際に目の当たりにした。昔の人が書いた文字は、現代人のそれと同じく、人によって個性が強く出るため、異体字解読辞典やくずし字解読辞典を使っても決して解読は容易ではなかった。しかし、簡単な文字でも一つ解読できた時は大きな感動を覚えた。昔の人の伝え遺したかった思いに近づくことができる素晴らしさを実感できるのも文化財調査の醍醐味の一つではないだろうか。今後も積極的に文化財調査に参加し、調査する側の視線で文化財を観察するなどして、今回の調査で得た経験を活かしていきたいと思う。

(4) 文化財子ども用教材作成

私たち文化遺産調査班は、大学に帰った後、常膳寺の文化財を陸前高田市の児童生徒に紹介するための教材作りを行った。文化財のことについて学習するのが好きな自分たちの視点から考えるのではなく、あまり文化財に興味・関心がない児童・生徒でも文化財の素晴らしさを分かってもらえるような教材作りを行うというのはとても難しく、記載する情報の選定や表現をかみ砕いたりするには試行錯誤を重ねた。次の世代に情報を伝えるのも文化財保存の大切な要素の一つであるため、教育普及活動を通じて地域の文化財の価値を分かってもらい、次世代に繋げていってもらいたい。

(5) まとめ

今回の文化遺産調査や被災地視察を通じて、過去を現在の私たちが次世代に伝えていくということが非常に重要だということを改めて思い知った。災害を過去のことと片付けず、教訓として伝えること、地域の文化財を宝として受け継ぐこと、根本的な考えは同じであると考えている。東日本大震災での教訓を、日本全国で活かしていくことが私たちのすべき何よりも大切なことであると私は思う。

実際に見て聞いて学んだこと

社会科教育専修2回生 仲村 幸奈

1. はじめに

2018年9月9日～12日に、私たち第7次陸前高田市文化遺産調査団は岩手県陸前高田市を訪れた。調査団は文化遺産調査班と防災教育班に分かれており、私は防災教育班として東日本大震災に基づいた防災の調査を行った。主な活動は、現地の及川征喜氏や松坂泰盛氏の案内の元訪れた奇跡の一本松見学や吉浜の津波石、気仙川を遡上した津波到達点の探訪を行ったり、教育委員会へ訪問し元気仙小学校教員の方に震災が起こった当時の学校の様子についてのインタビューなどを行ったりした。特に私たち防災教育班は、元気仙小学校教員である関戸氏へのインタビューが印象深く残り、それを踏まえたESD教材の開発もさせていただいた。

2. 現地を訪れて

私は、防災教育班として現地の調査に当たり、普段ニュースなどでしか見たことがなかった東日本大震災の様子を実際に見て、生の声を聞くことで以下の三つのことを学んだ。

①いざというときの判断

この学びは、主に元気仙小学校教員である関戸氏へのインタビューを通して得たものだ。気仙小学校は、全ての児童が助かったとして有名であり、私は訪れる前から知っていた。なぜ子どもたちの命を救うことができたのか、関戸氏にインタビューすることで学ぶことができた。気仙小学校では、地震が起こった後、マニュアル通りに運動場（1次避難所）へと避難した。しかしその後、校舎の屋上などから様子を見ていた教員たちからの話を聞いて、津波がもうそこまで来ていることが分かり、子どもたちの命を守るために学校の裏山「わんぱく山」に逃げるのが最善だと判断した。その判断が功を奏して、全員の命が助かった。関戸氏によると、このような判断をした理由がたくさんあるわけではなく、ただ「子どもの命を守りたかった」だけだったという。この話を聞いて、反対に自分たちの判断一つで子どもの命が脅かされてしまっていたかもしれないということを感じた。そう考えると非常に不安で怖い状況だっただろう。教員にとって子どもの命を守るというのは、当たり前のことであるからこそ、これは災害時だけでなく学校生活における教員の役割として常日頃からも言えることだと思った。何かが起こったとき、状況に応じた適切な判断を即座に行い、できるなら他の教員とコミュニケーションも取りながら行動に移していくことが大切だと学んだ。今回関戸氏は、教員全員が「子どもの命を守る」という強い信念を持っており、その想いは同じだったと述べられていた。いざというとき、適切な行動はもちろんのこと、目的を持った判断を行いたい。



奇跡の一本松

②ボランティアの心得

震災などが起こったとき、テレビなどでもよく見かけるのがボランティア活動の様子だ。東日本大震災が発生してから、現在では7年間が経過した。しかし、まだボランティア活動は行われている。実際に訪れ様子を見たが、まだまだ当時の様子が残っている部分も見受けられたが徐々に建物なども立ち、町が少しずつではあると思うが戻ってきていた。7年を迎えた現在では、ハード面でのボランティアではなくソフト面でのボランティアが非常に必要とされている。これは、心のケアが必要とさ

れていることである。私は一つ勘違いしていたことがあった。徐々に町も戻り家が建つようになり、仮設住宅を出られるようになる人が増えてきている現状に対して、良かったということしか考えていなかった。しかし、実際現地の人たちの話を聞くと、仮設住宅に残る側は孤独感やコミュニティ縮小による不安、仮設住宅を出た側も先に出てしまったと言う罪悪感や新しいコミュニティに対する不安などを抱えていることを知った。このような現状を知らず、被災した方々の気持ちなどをしっかりと考えることができていなかったと反省した。そういった人たちのケアというのにも必要になっており、7年経った今必要なボランティアは、話を聞いてくれるボランティアだと教わった。そして、ボランティアをするうえで必要なことについて学ぶことができた。実際に被災した経験もない者が、「分かります」と共感したところで、被災した人からすると「私たちの気持ちなんて分かるはずがない」となってしまう。そうすると、聞いてもらっている側も苦しんでしまったり、聞いている側もしんどくなってしまう。そのため、あくまで第三者として「共感」することはできないという前提で話を聞くことが大切だと教わった。自分の心を守りながらのボランティアが必要となるのだ。これは、ボランティアだけでなく、平日頃から相談などを受けるときも同じことが言えると思う。相手の気持ちを聞くことの難しさ、相手の気持ちを聞くときは自分の心にも負担が来るということを学んだ。

③経験を活かした取り組み

東日本大震災は、東北地方にたくさんの被害をもたらした。今回の調査で、「大変だった」「悲惨だった」と終わるのではなく、この経験を通して、被災地では自分たちの防災に対する取り組みには何が足りなかったのかなどということを考え、改善されてきている。例えば、避難訓練の見直しだ。私の経験上、学校で行われている避難訓練というのは、友達と話しながら移動し緊張感があまりなく、どこか遊び感覚なところがあった。それでは実際に災害などが起こったとき、何の役にも立たない。そこで、気仙小学校などでは、より現実に基づいた避難訓練を行うための工夫や、学校だけでなく地域の人と連携しながらの避難訓練など、これからの未来を担う子どもたちが正しく適切な行動を取ることができるように工夫を施している。自然災害などを経験した者は、危機感などの自覚がしっかりと身に付いている。しかし、そうでない者にはどうしても意識が足りない。そのギャップを埋めることが大切であるが、これは非常に難しい。誰もが自分ごととして捉え、考えていけるように積極的にいろいろな取り組みを行っていく必要があると思った。これは被災した場所だけでなく全国で行動に移していけないといけないところでもある。しかし、過去に津波被害にあったところでも、**津波の被害がここまで及んだという教訓の石碑**よりも下に家が建てられていた。ここまで津波が来る可能性が分か



復興したとばかり思っていた町

っているにも関わらずだ。これでは、昔の災害の経験などが全く活かされていない。このようなことから、経験し、そこから知ったことを決して無駄にせず、後世に受け継いでいけるように、行動していくことが大切だと見て、聞くことで学んだ。

3. まとめ

テレビなどで見ているだけで終わっていた東日本大震災のことを知りたいと思い参加した本活動であったが、想像とは大きく違う現状に実際に見て話を聞くことの重要性を再確認した。私の想像では、もうすでに復興

は終わっていたのである。そうではない現実を目の当たりにし、感じたことや学んだことを忘れずに、これから私が教員になったときなどの防災教育に活かしていきたいと思う。

7年後の被災地から見たもの

英語教育専修2回生 櫛 乃里花

1. はじめに

平成30年9月9日から12日の4日間にわたり、私は陸前高田市文化遺産調査団・防災教育班の一員として東日本大震災の被害のあった地域を訪れた。自身にとっては東北地方へ行くこと自体初めての経験であった。事実として知っている東日本大震災のイメージと、実際に訪れたことで得たイメージは全く異なるものであった。私が今回、陸前高田市文化遺産調査団・防災教育班の一員として活動した中で感じたこととして、以下の三つの観点から述べたい。一つ目に被災地の実態、二つ目に防災の不確実性、三つ目に防災教育の難しさである。

2. 現地での学びと事後のふり返り

一つ目の被災地の実態について詳しく述べる。東日本大震災が起こったのは、7年前の3月11日のことである。当時小学6年生だった私は、テレビに映る大津波の映像に衝撃を受け恐怖を感じた。それから7年が経ち、毎年3月11日にぼんやりと思い出すだけとなっていた震災の現状について、今回の調査を通して自分の目で見て感じる事ができた。現地は、7年が経ったとは思えないほど閑静であり、生々しい震災の跡が残っていた。中でも一番驚いたのは、市役所が未だにプレハブのままであったことである。



未だプレハブのままの市役所

そんな状態でも、インフラ整備はかなり進んだほうだと聞いてさらに驚いた。しかしながら、物質的な被害よりも深刻なのは人々の心の被害であるように思われた。現在も仮設住宅で暮らす人は多く、特に高齢者の方は毎日誰かが訪問し、様子を見たり話を聞いたりする必要があるという。身内を亡くされた方などは、悲しみや怒りの感情を、話を聞いてもらうことで緩和することができるそうだ。人々の心の被害は決して終わることはないのだと感じ、心の被害を少しでも和らげるためのボランティアが現在必要とされていることもわかった。また、被災地に暮らす人々だけではなく、現在被災地から離れて暮らしている人々への配慮も必要であると考えた。被災地から離れていても、当時の記憶や心に受けた傷はなくなるものではないだろう。周囲に共感できる人がいないために、うまく気持ちを整理できない人がいるかもしれない。特に、今後教員になるにあたっては、被災した児童が学級にいることも十分に考えられる。教師としては、無理に話を聞き出したりせず、当人が話し出すのを待って聞き手として支援するなどの対応が求められると考えた。また、いわゆる「震災いじめ」を防ぐ取り組みとして、学級内で被災地や被災者に対する偏見をなくす声掛けも必要であると考えた。

二つ目の防災の不確実性について詳しく述べる。これは陸前高田市のハザードマップを見せていただいた時に感じたことだ。市が指定したにも関わらず、津波被害が予想される区域に避難所が多くあったことは衝撃であった。また、気仙小学校元教員の関戸文則氏は、マニュアルで指定された避難所ではなく、小学校の裏山に逃げたことで助かったと述べられていた。ハザードマップやマニュアルはあくまで予想をもとに作られたものであり、予想を上回る災害が起こった場合には通用しないのだということがわかった。与えられた設備や情報を鵜呑みにせず、自分で判断を行う力が必要であると感じた。防災に確実な備えの方法はなく、その場における判断の重要性を学んだ。

三つ目の防災教育の難しさについて詳しく述べる。私たち防災教育班は、「自ら考え行動できる力を

育む」という目標を掲げ、東日本大震災を題材に奈良市の子どもたちに向けた指導案を作成した。そこで二つの課題に直面した。一つは、自分自身に大きな災害の経験がないということである。大災害の恐ろしさを伝えようにも、自分自身の体験ではないため情報源がインターネットに偏ってしまう。インターネット上では正しい情報と誤った情報が混在しており、適切かどうかを見極めることが難しい。この点において、今回の調査では現地の方々に直接お話を伺うことができたのは非常に価値のあることであった。しかしながら、お話ししていただいたことの中から児童に伝えるべき内容を厳選することが難しかった。全て伝えると指導案の軸がぶれる恐れがある一方で、災害について考えさせるにあたってはどれも知らせたい内容であった。また、人伝いに聞く話には、仲介する人間の主観が大きく反映される場合もある。そういった意味では、一番確実に事実を伝える方法は体験者の方が子どもたちに直接お話ししてくださることだと考えた。被災経験のないものが防災教育を行うに当たっては、できる限り正確な情報を集め、客観的に伝達することが重要であると感じた。

もう一つの難しさは、先にも述べた防災の不確実性である。教える立場として間違ったことは言えない一方、「こうすれば必ず助かる」という絶対的な保証はない。普段から備えがあるに越したことはないが、備えの程度も様々な指標があり一概にどれが正しいとは言いにくい。仮に備えたとしても、場合によっては全く役に立たない場合もある。教育現場で防災を扱う場合には、軽々と「こうすべき」とは言い切れない難しさがあると感じた。災害時は様々な被害が想定されるのであり、大切なのは想定外をいかに想定内にするかであると感じた。災害の恐ろしさを過去のことにせず、自分ごととして捉えさせる防災教育が必要であると考えた。

3. おわりに

以上のように、現地を訪れたからこそ知れた事実がたくさんあり、自身にとって非常に良い経験となった。また、自身の防災への関心をより深めるきっかけにもなった。防災は、国や自治体に頼りきりになることなく、地域単位または個人単位で意識を高めていく必要があると感じている。今回の調査を通して得た学びを活かし、教育現場でどのような防災教育がなされるべきかをこれからも考え続けていきたい。また、日本全体における防災の取り組みについて見聞を広げたいとも考えている。



筆者が衝撃を受けた、倒壊したままの建物

陸前高田市文化遺産調査団に参加して

造形表現（美術・書道）伝統文化教育専修
大学院1回生 近藤 花梨

1. はじめに

今起きている地震は被害が少ないと、東日本大震災で被災された方々からの話を伺った。平成30年は日本各地で相次いで地震や豪雨などの自然災害に見舞われた年となった。私達が陸前高田市に訪れた時、北海道では胆振東部地震の余震が続き次々とその被害状況が報道された頃だった。それと時を同じくして、岩手県では千人を超える東日本大震災の行方不明者の捜索が続けられていた。東日本大震災から月日は7年半経過したが、現地の人々にとって震災は今も過ぎ去っていない、現在の出来事である。冒頭



高田松原の砂浜再生を目指して

の言葉で、震災で失った物事が押し量りきれない程に甚大であったこと、日々の暮らしを立て直したかのように見える人々も、やりきれない心情であることを実感させられた。

2. 被災地見学

東北地方に訪れたのは今回が初めての機会である。空港の掲示板、時が止まって動かない天井近くの掛け時計、最上階だけが原型を留めた住宅団地、端折られた山間の鉄橋。津波の高さや到達範囲を示すものが至るところに点在しており、目にする度にただ驚かされるばかりであった。崩れた土砂の運搬や道路整備などの大掛かりな復興工事現場は肌寒い秋雨の降りしきる中でも絶え間なく行われていた。それを見守るかのようにそびえ立つ奇跡の一本松は現在レプリカであるが、りくカフェなどのお店に飾られている暖簾やポスターなどでもよく見かけ、地域のシンボリック的存在であることが窺われた。今後建設される新たな道路や建物も、そこで暮らす人々にとって希望の景観となることを願ってやまない。

3. 文化財調査

城跡や寺院、博物館等を見学し、気仙地方ゆかりの文化財について実物を見て理解を深め、常禅寺、長谷寺、圓城寺では仏像彫刻の現地調査をさせて頂いた。山岸先生が行なう仏像の写真撮影、品質構造調査の補助に携わり、他にも常膳寺では千手観音菩薩立像光背のスケッチによる形状記録と報告、圓城寺では馬頭観音菩薩坐像の像底墨書の解読などを行なった。仏像調査の経験が浅いため、仏像が安置されている境内付近で緊張しながらも安全に立ち振舞おうと努力するのが精一杯な状態であり、仏像の構造究明に必要な知識などの勉強不足も痛感させられた。しかしいずれも間近で仏像鑑賞できる環境にあつてこそ身に付けることができる学びである。調査経験の下地を積む機会が得られたことに改めて感謝したい。

4. 教材開発

常膳寺観音堂の二尊に着目し、「常膳寺―気仙の観音―」と題した折り込みブック（全体：A3用紙カラー両面刷り）を作成した。常膳寺を題材とする教材開発は以前にも第一次陸前高田市仏像調査班が作成しているが、その内容は初回調査ということもあって「常膳寺とその仏像の紹介」を主としており、またこの数年間の調査成果により加筆修正も必要であると判断したため、新版の発行に至った。

今回は「常膳寺とその仏像を題材にした仏像鑑賞の手引き」となるよう、小学校高学年を対象とする子ども向けの美術鑑賞教材開発に取り組んだ。仏像の魅力を伝えることで子どもたちが地域に残る文化財について興味関心をもって知ろうとする、後世まで守り大切にしようとする姿勢を養うことを目的とする。

折り込みブックを組み立てたとき、表面は常膳寺および観音菩薩二尊の紹介に続き「観音菩薩ってなんだろう」「どうやって作られたんだろう」など疑問を投げかけた頁を設けて拡大図や比較図を観観察することを促している。折り込みブックを広げた裏面は表面の疑問を解く鍵となる注目点を紹介している。調査を重ねて発見した新知見、仏像を身近に拝観した実感などを盛り込むことで仏像調査の存在とその観点を知ってもらうこともねらいとしている。報告会でのご指摘の通り、子ども達が質問すると想定される仏像の由来や造形に対応しきれないものとは言えないが、両手に収まる大きさの紙面内で身近に仏像にふれる初めての機会を、地元の常膳寺を通して行なってくれば幸いである。

4. おわりに

陸前高田の皆さんはこちらが躊躇するのも受け入れて積極的に震災のことについて話し、遺された文化財に対する思い入れを語っておられ、朗らかでいて熱い信念を持つ強さが印象的であった。それに応えられるよう、今後のために自身に出来ることを考えていきたい。



常膳寺仏像調査にて



常膳寺

気仙の御人の

いわて県 岩手県陸前高田市小友町 字上の坊

常膳寺



箱根山のふもとに位置する、真言宗の寺院。観音堂・阿弥陀堂・薬師の3つの建物には様々な仏像がおさまられている。中でも十一面観音菩薩立像は「気仙三観音」のひとつと呼ばれている。



常膳寺観音堂本尊。像高3メートルを超す巨像。秘して開帳の年のみ拝観できる。



室町時代頃に作られたとみられる。常膳寺観音堂前立尊。十一面観音菩薩立像とともに、

手

観音菩薩は色々なアイテムを持つことができるよ。何をすればいいかな？

頭

十一面観音とともに、頭の上に顔がたくさんあるよ。何を置いているかな？

服

上はななめがけのストール？ スカートを着ているみたい

千手観音の顔をよく見てみよう！

木の年輪が見える！

この像は木材から作られたんだね。

とどろき入ってる？

干割れといって、木材に含まれている水分が乾燥してきたものだよ。

色がちがうところがある

ほとんど木そのままの素地仕上げで作られて、顔の一部だけ色をつけているよ。色で描いたのはどこかな？

千手観音の顔をよく見てみよう！

よく観察してみよう！

色は裏面にあるよ

折り込みグッズのつくりかた

「つくりかた」面が右下にくるように広げ、縦にそってたて半分にやま折りする。

たに たに

縦にそって折り目をつけ、本の形になるように折りました。

できあがり！

学校名

学年

組

観音菩薩のほかに、どんな仏像がいるのかな？調べてみてね！

わたしは悟りをひらいたもの。シンブルな姿のままですべての世界を救う力をもつ。

わたしは悟りをひらいたもの。シンブルな姿のままですべての世界を救う力をもつ。

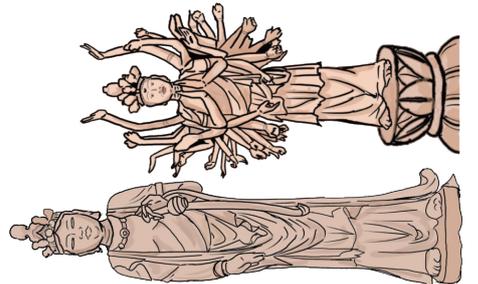
A 奈良の天仏

B 常膳寺千手観音菩薩

わたしは悟りをひらいたもの。シンブルな姿で、この世に生きていくものを救いたい。

わたしは悟りをひらいたもの。シンブルな姿で、この世に生きていくものを救いたい。

B



おんぼん 仏教はインド生まれのブツダという人からできたんだ。だからインドの暑い気候に似合う涼しい服を着ている仏像が多いんだよ。



うしろ姿も、まるで水が流れているみたい。キレイな衣のひだが表されているよ。衣のひだの彫刻表現をみて、仏像を作った時代がわかることもあるんだって！

ちゅうおう 中央に花飾りをつけたヘアバンドは「天冠台」といって、宝冠（ティアラ）をのせるためのアクセサリだよ。頭の上にいる顔が宝冠をつけているのに気づいたかな？



さと 悟りをひらいた大仏様よりも、観音菩薩はたくさんいるよ。これはブツダが仏教をひろく前、王子様だった頃の姿をまねしたのなんだ。

おのんぼん 観音菩薩は、人々のすべての願いをかなえたい！いつでもどこからでも救いの手をさしのべたい。どんな迷いや不安も見逃さないように見守ってほしい…。そんな思いから、人よりも手や目を多くするなど色々な変身をして、ふしぎな道具の方で人々を救っているんだ。

ずいびょう 水瓶



常陸寺の十一面観音はここに蓮の花をさしている。たとみられる

おの 斧



心の中にある悪い考えを切って断つといわれている

クイズの答え

正しい正解は…

B

ふくすう 複数の木材を組み合わせてつくられています。このような彫刻技法は「寄木造」と呼ばれています。



ココに注目！

じゅういちめん 十一面観音の首のしわが並んでいる。一番下の線をよく見ると隙間がある。実はココが頭（上）と体（下）の木材をつないでいる部分。専門家でも難しい、貴重な発見だ！



たくさんのお木を組み合わせるけれど、一本の木からできているように見せるために首のしわで上手になぞりをつけている。この仏像を作った人は十一面観音の正面をよりキレイに仕上げたくて、こんな工夫をしたのかもね！

よせぎづくり 寄木造のいいところ

- 小さな木材まで使うことができ、無駄が少なくない
- 部品ごとに、手分けして彫る作業ができる
- 組み合わせることで、元の木よりも大きい仏像をつくることができる

- 1 木材を積み木のように組み合わせる
- 2 大まかな形に彫り、内側を削り抜く
- 3 組み立てて、細かい部分も彫る
- 4 彩色や漆箔をほどこす

よせぎづくり 寄木造の手順

じつ 実は仏像の中心は空洞なんだ！これは木の収縮による割れを防ぐためだよ

陸前高田市文化遺産調査における ESD 教材開発(8)

—自ら考え行動する力を育む ESD 防災教育 気仙小学校の避難から—

仲村 幸奈

(奈良教育大学 社会科教育専修)

櫛 乃里花

(奈良教育大学 英語教育専修)

上田 薫

(奈良教育大学 美術専修)

北村 恭康

(奈良教育大学 次世代教員養成センター)

The Eighth Teaching Material Creation for Education for Sustainable Development at Researching Cultural Heritage in Rikuzentakata City

—Disaster Prevention based on ESD ;Think and Act on one's Initiative —
(Field Investigation at Kesen Primary School)

Yukina Nakamura

(Undergraduate Student, Nara University of Education)

Norika Yagura

(Undergraduate Student, Nara University of Education)

Kaoru Ueda

(Undergraduate Student, Nara University of Education)

Kyoyasu Kitamura

(Teacher Education Center for the Future Generation Nara University of Education)

要旨：陸前高田市文化遺産調査を実施して今年で7年目になる。2011年3月11日に起きた東日本大震災において多大な被害を受けた陸前高田市は、2018年現在、物質的な復興は進みつつあるように見える。また、聞き取り調査からは、教訓として前例にとらわれることなく率先して避難行動をとる重要性や、避難した後も、常に情報を得る努力をしなければならないことを再確認することができた。本稿では、災害発生時、情報を積極的に収集すると共に、得られた情報を批判的に検討、判断をして、命を守るために、「自ら考え行動する」防災教育を ESD の視点から提案する。

キーワード：持続可能な開発のための教育 Education for Sustainable Development

自ら考え行動する力 Faculty to Think and Act on one's Initiative

判断力 Judgement to Survive

1. はじめに

奈良教育大学では、地域と連携した「学ぶ喜びを知り、自ら学び続ける」教員養成に向けた、持続可能な開発のための教育活性化プロジェクトの一環として、陸前高田市を中心とした文化遺産調査に取り組んで7年目となる。2018年度は、本学教員2名、大学院生1名、学部生5名からなる調査チームで、9月9日～12日にかけて、文化財科学や美術史学の知識を活用した文化遺産調査班と ESD・防災教育の研究開発班の2班に分かれて活動を行った。主な日程は表1の通りである。

東日本大震災で多大な被害を受けた陸前高田市は反省

や課題を整理して、災害に強いまちづくりのため『陸前高田市東日本大震災検証報告書』（以下、検証報告書）を2014年に発刊した。その中で、人的被害を軽減するための教訓として、

- ①早期に避難行動を開始すること。
- ②あらかじめ決めていた避難場所に避難した場合も、周囲の状況や各種情報に気を配り、危機を感じたらさらに高所などへ避難すること。
- ③地震発生時に津波の影響を受けにくい場所にいた場合は、海の近くや低いところには近づかないこと。

④想定される津波に対応した位置(高さ)へ津波避難場所を置くとともに、そこからさらに高所へも避難できるような避難路の整備を行うこと。

の4つを挙げている⁽¹⁾。①～③は個々の行動であり、④は行政の施策である。

本稿では、①～③の行動の必要性と共に、震災発生当時、陸前高田市立気仙小学校^(注1)で子どもたちを避難させていた関戸文則氏(現陸前高田市教育委員会指導主事)、現地でお世話になった市教育委員の松阪泰盛氏、地域の防災調査家の及川征喜氏夫妻から聞き取り学んだことを生かしたい。そこで、災害発生時に「自ら考え行動する」ことができる力の育成を目的とした教材を開発したので報告する。

表1 4日間の主な日程

	ESD・防災教育班	文化遺産調査班
9日	・仙台市博物館・仙台城見学 ・黒石寺 薬師如来坐像、僧形座像拝観	
10日	陸前高田市教育委員会表敬訪問	
	・広田半島周辺の津波関連石碑探訪	・常膳寺千手観音立像調査
11日	・吉浜の津波石探訪 ・陸前高田市教育委員会に聞き取り調査	・長谷寺十一面観音像調査 ・圓城寺馬頭観音菩薩坐像調査
12日	・奥州市埋蔵文化センター見学 ・毛越寺、中尊寺等拝観(平泉町)	

2. 防災とESD

片田(2012)は「今の日本の防災に求めることは、人が死なない防災を推進することであり、それこそが、防災のファーストプライオリティーだと考える」⁽²⁾と述べている。さらに「人為的に与えられた想定にとらわれることなく、また自らの命を行政に委ねることなく、主体的にそのときの状況下で最善を尽くすこと以外にありません。」⁽³⁾とも述べている。また、行政から出されたハザードマップで市民の主体的な判断で行動を促しているものがある。例えば、愛知県清須市の『水害対応ガイドブック』の「逃げどきマップ」と名付けられた中に「あくまでも想定されたシナリオにすぎません。実際の洪水はその通りに発生するとは限りませんので、気象情報・水位情報・避難情報や周辺状況などに注意をはらって、ご自身の判断で行動してください。」⁽⁴⁾と記されている。この水害対応ガイドブックの洪水被害軽減の7ヶ条では、表2のようになっている。

これらから読み取れることは、命を守ることが最優先であり、与えられた情報を批判的に検討し、主体的に行動することが必要であるということである。

三陸地方には「津波てんでんこ」という言葉が伝わって

表2 水害対応ガイドブックより

第一条	清須市水害対応マップをなくさない。
第二条	「水害は起きない」という認識は改める。
第三条	自宅や勤務先での浸水の可能性をマップで確認。
第四条	自ら積極的に情報収集を。
第五条	行政に頼りすぎない、自分の身は自分で守る。
第六条	自宅外へ避難すべきか、それとも自宅に留まるか、冷静に判断しましょう。
第七条	想定に依存しすぎない。

いる。山下(2008)は「てんでばらばらに、分、秒を争うようにして素早く、しかも急いで速く逃げなさい、これが一人でも多くの人が津波から身を守り、犠牲者を少なくする方法です、という哀しい教えが『津波てんでんこ』という言葉になった。」⁽⁵⁾と述べている。この行動を可能とするには、「必ず逃げている」という信頼関係が必要になる。検証報告書でも避難以外の行動として、子どもの引き取り、同居家族の様子を見に行く、別居家族の様子を見に行く等、家族の安否を気遣う行動が見られた⁽⁶⁾。これらは時間的余裕があれば当然の行動と思えるが、差し迫ったときは、まず、自らの命を守ることが最優先である。陸前高田市教育委員会が配布している防災教育読本『明日のために』に「家の人と考えよう」という単元がある。子どもがいろいろな場面で津波や地震など自然災害に遭遇した時、どこに避難するのか、どこで家の人と待ち合わせをするのかを確認する単元である。この確認こそ家族が互いに信頼し「津波てんでんこ」を可能にするものであり、各自が率先避難者としての意識を持つことができるものである。

陸前高田市(2014)では、東日本大震災の反省と教訓として以下の6つのことが述べられている。

1つ目は、「避難が何より重要であること。」2つ目は、「避難所に逃げたら終わりではないこと。」3つ目は、「公的な役割を持つ人の安全の確保が必要であること。」4つ目は、「災害に強いまちづくりが必要であること。」5つ目は「社会的弱者が逃げ遅れのないような社会の実現が必要であること。」6つ目は「防災の心得」である⁽⁷⁾。本稿では自らの命を守るために、「自ら考え行動する力を育む」教材を提案するにあたって、1つ目・2つ目に着目をして、「自ら命を守る」行動について検証する。

1つ目の避難が何より重要であるとは、避難のタイミングである。前述の検証報告書でも津波到達時まで避難した人の割合は、犠牲者では5割程度だったのに対して、被害が無かった人では8割程度と大きな差が見られたと述べている。さらに検証報告書の中から津波避難に対する人々の意識や行動を、①地震直後にいた場所への津波来襲の予測、②大津波警報認知後の行動意向、③避難呼びかけ認知後の対応意向、④津波到達までの避難意向、から見てみると、①では「来ないだろう、考えなか

った」人が31.9%、②③では「その他」と答えた人が②では30.0%、③では28.7%となっている。「その他」と答えた人の内訳は「警戒する必要があるが、海の様子を見て判断」「警戒する必要があるが、周囲の様子を見て判断」「避難するほど危険はない」「その他」である。④では「思わなかった」と答えた人が20.5%であり、思わなかった理由の上位は、「海から離れた場所にいた」「過去の地震でも津波は来なかった」「津波の恐れのない高台にいたと思った」である⁽⁸⁾。多くの人は、避難行動をとったり、避難しようとしたことが分かるが、避難のタイミングを外した人もいたことが②③の「その他」と答えた人の対応、④の回答から推測される。

過去の事例からの判断や、自分は安全だとの思い込み、周りの様子を見てから等ではなく、日ごろから、どのような状況になれば避難スイッチを自分に入れるのか持っておかなければならない。自然災害に対して自分の命は自分で守る点からも防災マップや地域様子などに注意を払い、減災・防災への意識づけが日ごろから必要である。

2つ目の避難所に逃げたら終わりではないとは、状況を判断して、さらなる行動に移すことである。検証報告書によれば「指定避難所(一次避難所)での犠牲になった人の推定が303人から411人出たことは痛恨の極み」と述べている。また「一時避難所67か所中38か所で浸水しており、9か所で犠牲者が出ている。」⁽⁹⁾と記している。さらに、「犠牲者は津波到達時に避難所にいた割合が高く、無被害の人は避難場所以外の高台の割合が高い。」・「避難所に留まらず、さらに積極的な行動をとった人が助かった」⁽¹⁰⁾とも述べている。当時の気仙小学校(一時避難所)教員で児童を運動場に避難させていた関戸氏は聞き取りの中で「ここまで津波が来ないだろうとの思いと、目の前に迫った壁(津波)を見て、とっさに児童を裏山に駆け上らせた」と回顧されている。この臨機応変な行動がその場にとどまることなく、さらに安全な高台に移動させることにより、犠牲者を出さずに済んだといえる。

以上2点から、災害時には率先的に避難をし、時には、臨機応変に判断をして、自らの命を守ることが重要である。このような行動がとれるには、与えられた情報、もしくは、自ら得た情報を鵜呑みにせず批判的に検討し、主体的に行動する力を育むことが必要である。

国立教育政策研究所は「学校における持続可能な発展のための教育(ESD)に関する研究」(2012)の中で、ESDの視点に立った学習指導で重視する能力・態度を、①批判的に考える力、②未来を予想して計画を立てる力、③多面的、総合的に考える力、④コミュニケーションを行う力、⑤他者と協力する態度、⑥つながりを尊重する態度⑦進んで参加する態度の7つを挙げている⁽¹¹⁾。このようにESDで育てたい力に、①批判的思考力が挙げられていることから、防災教育をESDで取り扱う内容として適切なものであるといえる。

3. 避難時の行動

3.1. 気仙小学校の避難時系列

本調査では、当時気仙小学校5年生の担任であった、関戸氏からの聞き取りを行った。主な結果を以下に記す。

震災当時、気仙小学校の全児童数は92名であり、校舎の位置は図1の通りであった。



図1 旧気仙小学校の位置 (○印)
(国土地理院 25000 分 1 地形図に加筆)

表3 関戸氏からの聞き取り

<p>〈地震発生〉</p> <ul style="list-style-type: none"> ・震度6強の強い地震が起こる。 ・ガラスが割れたため防犯ベルが鳴りやまず、音にかき消され指示が通らない。 ・低学年はパニック状態に陥る。 ・運動場の地割れなどがひどく、危機を感じた主任が「荷物は持たず、上着を着ろ」と指示。 ・津波が来ると予想し、運動場プール横(一次避難所)に避難。 ・全校6時間授業だったため、全学年合わせて100人ほどの児童が学校にいた。 <p>〈津波発生〉</p> <ul style="list-style-type: none"> ・津波発生の時刻は14時46分。 ・大津波警報が発令される。当初は5メートルと予想されており、堤防を越えなければ大丈夫と安心したのも束の間、予想が7メートルに変更される。 ・子どもたちを学校の裏山(通称ワンパク山)のふもとへ一旦移動させる。 ・二次避難所に移動するほうがよいと判断したが、屋上から周囲を観察していた先生から「もう海の底が見える」との伝達があり、間に合わない判断。 ・児童の保護者が子どもを引き取りにくるが、家には帰さず共に行動するよう指示する。 ・埃のにおい、水煙のにおいが辺りに漂い始める。 ・黒い壁(津波)が背後に見え、あまりの危機的状況に山に登る以外の選択肢はないと判断。 ・道もない藪の中を、高学年の児童から順番に登らせる。高学年が通る後ろに低中学年をつけて行かせた。 ・関戸氏は集団の一番後ろで児童の背を押し続けた。
--

・津波は裏山のふもとにまで到達した。逃げ始めてから 30 秒～1 分後であった。

・無我夢中で藪をかき分けたため、顔中に傷がついたが痛みを感じなかった。

〈周囲の状況〉

・小学校が一次避難所だったため、校庭には何十台もの車が停まっていた。地域の人を数人は引っ張ったが、全員を助けるのは厳しかった。

・津波は二次避難所のある場所まで到達していた。

・山の上に逃げたのはいいものの、児童が広範囲に広がってしまう。教員が手分けして探し、約 1 時間半後、児童全員がいることを確認。

〈避難所での生活〉

一日目

・消防車が 1 台到着する。低学年を消防車に乗せてもらい、林道の下集落（オサバ地区）へ移動する。

・熊谷さんという方に、100 人近くが避難。1 部屋に集まり、体育すわりで待機。⇒その後、月山神社と長延寺へ移動

・音がない、光がない状態での生活は不安感でいっぱいだった。

・情報を得る手段も発信する手段もない。唯一、地域の人たちが子どもの名前をひたすら広告の裏紙などに書き、林道に様子を見に来た人に渡すという方法をとっていた。

・食料はなかったが、不思議と腹は減らなかった。水産工場跡に行き、あたりに散らばる魚や缶詰などを確保し、焼いて子どもたちに食べさせた。

・トイレがなく、衛生的な不安が大きかった。掃除も大変であった。

・インフルエンザの流行も若干残っていた。

・避難所には、たくさんの遺体が運ばれてきた。子どもたちに見せないように教員が配慮した。

二日目

・小学生は長部小学校へ移動。

三日目

・地区ごとに児童を分けた。全体連絡を地区の代表に伝達することで効率化を図った。

〈当時を振り返って〉

・山に避難するというのは、マニュアル通りの行動ではなかった。しかし、その場で反対意見を述べる教員は誰一人いなかった。子どもの命だけは守らねばならないという強い意志が、教員団の結束の原動力となった。

・親が犠牲になった子どもがたくさんいた。親を亡くした子どもの心のケアが重要だった。

〈ボランティアとの関わり〉

・同情や助けようという意識が強く感じられるのは逆につらく、日常的に普通に接してくれることが嬉しかった。

・教員の立場から子どもの心のケアをするのは難しかったので、子どもの話し相手になってくれるボランティアの存在が大きかった。

〈7 年たった今〉

・仮設住宅を出て家に移るも、新しいコミュニティづくりに戸惑い不安定になる人も多い。

・一人きりで暮らす人や家族を失ったことで苦しむ人が大勢いる。そういう人たちにこそ、話を聞いてくれる人が必要。

3.2. 緊急避難時の教員の対応

前述の関戸氏の話から、ここでは緊急避難時における教員の対応に着目する。

震度 6 強の強い地震が起こった後、気仙小学校の児童たちは一次避難所である運動場に避難した。その後、保護者が子どもを迎えにやってきたが、教員はこの場所と一緒にいるほうが安全だと判断した。関戸氏によると、一週間前にも地震が起こり避難をしていたが、その際は児童たちを保護者と共に帰らせたとのことであった。東日本大震災当時、一週間前と同じ対応をしていれば、児童たちは助かっていなかったかもしれない。また、次の避難場所への選択を迫られたとき、教員は二次避難所へ逃げる選択をしなかった。理由としては、海が見えない場所にあるため外の様子が分からず危険だからだと述べられていた。そして、結果的には、裏山に逃げることになり児童全員が助かった。事実二次避難所は、津波の被害に遭っている。この裏山に避難するまでの一連の流れは、置かれた状況から規定にとらわれず判断をした「命を守る」行動であったと考える。

また、気仙小学校の当時の教員は、一次避難所に逃げた後、「次は」と必ずその後のことを考えていた。しかし、「避難して終わり」「避難したから安全」という考え方を持っている人もいると思われるが、そうではなく、避難してからも「次に逃げる必要はないか」・「逃げるとしたらどこか」など、常に考えておかなければならない。

4. 学習活動の概要

検証報告や聞き取り調査からもわかるように、過去の事例や安全という思い込みから避難スイッチが入るのが遅れてしまい、タイミングを逃すようなことがあってはならない。また、無事に避難できたとしても、さらなる事態に備えておかなければならない。以上から、自然災害が発生した時、周囲の状況を確認し、得られた情報を批判的に検討して命を守る、「自ら考え行動する」子どもの育成を図るための学習活動を提案する。なお対象学年を 5 年生としたのは、社会科に産業と情報との関わりや国土の自然環境と国民生活との関連について自然災害への対応に関する学習内容が含まれているので、教科横断的な学習が行えると考えた。また、学習においては、以下の 3 点を重視した。①災害を自分事として捉えさせる。②災害発生時、自分のとる行動を考えさせる。③家族との話し合いで、災害への備えや災害時の対応等についての必要性を認識させる。

表4 単元名、対象学年、単元目標、評価

単元名 (対象学年・教科)	自然災害から守ろう「命」 (小学校5年生 総合的な学習の時間)	
単元の目標	<ul style="list-style-type: none"> ・自然災害の恐ろしさを知り、各警報について理解する。 【知識・技能】 ・警報発令時又は危険が迫っていると感じた時、率先して避難することを呼びかけることができる。 【思考・判断・表現】 ・災害時の対応について家族の中で話し合い、生活の中で生かせるように考える。 【主体的に学習に取り組む態度】 	
ア 知識・技能	イ 思考・判断・表現	ウ 主体的に学習に取り組む態度
①防災情報など必要な情報を読み取ったり、集めたりすることができる。 ②災害に対する備えの必要性を理解している。	①状況を判断し、率先避難者となることの重要性を考えている。 ②自然災害を自分事として捉え、学んだことを分かりやすく伝えようとしている。	①防災について関心を持ち、意欲的に調べたり、考えたりしている。 ②自分の命を守ることを意識して、今自分にできることを考えている。

表5 単元の概要(全7時間)

学習活動	指導上の留意点	評価
1、日本ではどのような自然災害が発生しているのか出し合う。(1時間) ・地震・津波・水害・土砂災害・火山の噴火 ・警報の種類とその意味を知る。	<ul style="list-style-type: none"> ○新聞やテレビなどで知ったことを引き出す。 ○各地で起こった主な災害を白地図に記させる。 ○自治体からハザードマップ等、情報が知らされていることを思い出させる。 	ウ①
2、東日本大震災の被害の様子を知る。(1時間) ・地震の被害(域) ・津波の被害(域) ・人々の姿に着目する。 ・情報は変化していることに気付く。 ・学習課題を作る	<ul style="list-style-type: none"> ○陸前高田市の検証報告書の資料と共に写真や映像を用いる。 ○前もって得られる情報は一例であることに気付かせる。 ○避難情報の時系列から考えさせる。 	ア①
災害発生時、どのように行動をしたらよいのだろうか		
3、関戸氏の聞き取りから、災害時の行動で何が大切なかをグループで話し合い発表する。(1時間) ・住んでいる地域でも起こる可能性があることを再認識する。	<ul style="list-style-type: none"> ○関戸氏の話をもとに配布する。 ○非常に危険な状態であったことを知らせる。 ○情報の大切さや臨機応変に対応する重要性に気付かせる。 ○住んでいる地域のハザードマップを確認する。 	イ①
4、住んでいる地域で心配される災害にどのような備えが必要なのか、避難勧告が出された時、自分はどのように行動するのかをグループで話し合う。(2時間) ・ハザードマップで居住地の様子を確認 ・情報の収集、家の中の家具などの設置状態 ・避難勧告で ⇒ 避難する しない	<ul style="list-style-type: none"> ○災害を自分事として考えられるように、前時までの学習を振り返りさせる。 ○情報を提供する。 ・気象庁 HP 等 https://www.data.jma.go.jp ○家から避難所までの確認や市内の避難場所の確認をさせる。(ハザードマップ) ○家にいる時、外出している時の連絡の確認 	ア② ウ①
5、災害が発生した時のことを題材に家族と話し合う(家庭学習)	<ul style="list-style-type: none"> ○家人との連絡、避難場所等の確認 ○避難場所や避難経路の確認 	ア②

6、5をグループでまとめ発表し、学級で共有する。 (1時間)	○共有したものを元に、災害時の行動を確認する	ウ②
7、学んだことを全校に伝えよう。(1時間)	○分かりやすい発表形式を工夫する。	イ②

5. 終わりに

本稿では、災害発生時の避難、臨機応変な判断の必要性を意識して教材を提示した。検証報告書にもあるように陸前高田市の津波被災者の中には、大津波警報発令を知った後も避難行動をとらなかった人もいる⁽⁸⁾。避難するタイミングは状況により異なるだろうが、命を守ることを考えれば、互いに声を掛け合い、少しでも早く避難することを最優先にすべきと考える。また、聞き取り調査からは、津波の高さ情報が刻々と変化し、危機的状況へと変わっていく様子が伺えた。そして、教員のとっさの判断で二次避難所ではなく、学校の裏山に避難させることにより、気仙小学校の子どもたちの命を救った。そこには、気仙小学校教員の子どもを守る強い意識を見ることができた。これらは、最新情報の重要性と共に先を見越した臨機応変な行動がいかに大切なのかを示すものである。自然災害が頻発している今、自らの命を守るため適切な判断ができる防災教育を目指していきたい。

注

(1)陸前高田市立気仙小学校は、東日本大震災の当日、体育館は燃え、校舎は三階まで津波に飲み込まれた。そ

の後、長部小学校と統合し、旧長部小学校の校舎を使用して授業が続けられたが、2019年1月18日新校舎の落成式を迎えた。

引用参考文献

- (1) 陸前高田市(2014), 陸前高田市東日本大震災検証報告書, P62
- (2) 片田敏孝(2012), 人が死なない防災, 集英社, P11
- (3) 同上, PP51-52
- (4) 愛知県清須市 水害対応ガイドブック
<http://www.city.kiyosu.aichi.jp> (2018.1.22 閲覧)
- (5) 山下文男(2008), 津波てんでんこ -近代日本の津波史-, 新日本出版社, PP52-53
- (6) 陸前高田市(2014), 陸前高田市東日本大震災検証報告書, P60
- (7) 同上, PP2-4
- (8) 同上, PP27-32
- (9) 同上, PP85-87
- (10) 同上, P91
- (11) 国立教育政策研究所(2012), 学校における持続可能な発展のための教育(ESD)に関する研究, P9

十一面観音菩薩立像

岩手県大船渡市 長谷寺

木造 素地 一軀 像高二三四・五cm

形状

頭上に十一面を頂く。仏面の下に三頭円錐形の部分（髻）、その下に覆鉢状の部分（地髪部）。ただし、地髪部とすると覆鉢状の膨らみが大きい。地髪部平彫。両耳後ろから肩にかけて垂髪を表す。天冠台下から紐二条・列弁文・花形。白毫相を表さない。耳垂環状不貫。三道相を表す。条帛・裙・腰布・天衣を各着ける。天衣は残存部から、両肩に懸けられた天衣のうち一方が背面を廻る、対称面をめぐる天衣が一重になる形式であったとみられる。

品質構造

広葉樹散孔材（カツラか）。

頭体幹部を通し、天冠台上地髪部以下を、木心を像中央やや前より通る線に込める縦一材より彫出。木心は頸の付け根に近い顎下で一度現れ、三道下以下に再び籠められると推定。この頭体幹部材を、両肩後ろを通る線で前後に割り、体部に内剝を施す。前後割目は右体側では裾裾張出し部の後ろをほぼ垂直に通るが、左では割目が傾き下端が裾裾左張出し部の前に至る。この頭体幹部材には像背面裾右体側割目の外に大きな節があり、霊木的な材の使用が想定される。頭上面・垂髪結部・両肩以下・両足先別材。右肩以下は指先まで一材。左肩以下は肘・前膊半ば（三箇所）で短く。像表面は元素地色彩色か。眉・目・髭・胸飾墨描。唇に赤。

制作年代

平安時代後期（一一～一二世紀）

備考

二、実査 平成三十年九月十一日（山岸公基・近藤花梨・西村奏・辰上亜弥子）

村上仁助判

□□□

制作年代

江戸時代（一七〇一―一九世紀）

備考

一、実査 平成三十年九月十一日（山岸公基・近藤花梨・西村奏・辰上亜弥子）

馬頭観音菩薩坐像

岩手県陸前高田市 円城寺

木造 彩色 一軀 像高三六・〇 cm

法量(単位cm)

像高	三六・〇		
髮際高	二七・〇	面長	五・〇
頂顎	一三・六	耳張	七・〇
面幅	五・一	胸奥	八・二
面奥	七・一	膝張	二三・〇
腹奥	九・〇	裳先奥	一九・〇
膝奥	一七・〇		

品質構造

広葉樹環孔材(センダン)か。

頭体幹部を通し、地髪部台上より台への両肩を舌状に覆う部分および両腰脇小三角部を含んで縦一材より彫出。腹部をかき込んで両脚部材と接続する。この頭体幹部材に馬頭・両上膊半ば以下(両袖を含む)両脚部を別材で作し寄せる。頭体幹部には内刳を施さない。両脚部底面には長方形の刳り上げ(像底での張り一六・五 奥五・八 高さ一・五)を設ける。

銘記

両脚部の像底よりの刳り上げ部に、次の銘記がある。

(梵字バン) 奉造立所願成就□也



長谷寺 十一面観音菩薩立像 全身右背斜側面（左写真）・頭部正面（右写真）



一、 長谷寺 十一面観音菩薩立像 頭上面（左写真、頭部右側面より）・右体側割目外の節（右写真）



長谷寺 十一面観音菩薩立像 全身左斜側面



長谷寺 十一面観音菩薩立像 全身正面



円城寺 馬頭観音菩薩坐像 全身右側面（左写真）・全身左斜側面（右写真）



円城寺 馬頭観音菩薩坐像 像底と墨書銘（左写真）・頭部左側面（右写真）



円城寺 馬頭観音菩薩坐像 全身正面

岩手県陸前高田市円城寺
岩手県大船渡市長谷寺
仏像調査報告書

2019年3月
奈良教育大学

平成30年度 近畿ESDコンソーシアム
奈良教育大学 陸前高田市文化遺産調査報告書

平成31年3月31日

国立大学法人奈良教育大学

〒630-8528 奈良市高畑町

次世代教員養成センター ESD・教材開発領域

TEL 0742-27-9367・FAX 0742-27-9147（教育研究支援課）